

# 鶴山書院報

第4号  
 公益財団法人  
 孔子の里  
 〒846-0031  
 佐賀県多久市多久町  
 1843番地3東原庫舎内  
 TEL 0952-75-5112  
 FAX 0952-75-5320  
 E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
 URL http://www.ko-sinosato.com  
 発行人  
 理事長 横尾 俊彦

## 「恕」で拓く未来の活路

創建三百年・友好二十五周年で

曲阜孔廟参詣



公益財団法人孔子の里  
理事長（多久市長）横尾 俊彦

今年、多久聖廟は創建三百年になります。孔子廟の御縁で、多久市と孔子生誕地・中国山東省曲阜市は友好都市締結二十五年であり、記念事業として「市民の翼（41人）」で曲阜を訪問しました。

### 曲阜で孔廟・孔墓に誓う

曲阜市人民政府の配慮で、多久市長による孔廟への献花と公式参拝、記念植樹を参加者と共に行うことができました。北京の紫禁城にも匹敵する威風堂々たる曲阜の世界遺産「孔廟」で、儒学の教えや人格陶冶に思いを馳せ、両市の友好交流、恕・仁の精神の展開を祈念する機会に恵まれました。

同じく世界遺産の「孔府」（孔子子孫の住まい）、「孔林」（世界の孔家の広大な墓所）も数年ぶりに訪れ、孔子の墓前で額づき妻と一緒に念じました。

また北京では、中日友好交流協会の重鎮で、多久と曲阜の友好締結に尽力された王秀雲先生ほか協会幹部にもお会いし、歓談することができました。素晴らしい配慮の情が心に沁みました。

さらに、孔子直系第七十七代子孫で今年百二歳の孔德懋先生を表敬訪問。長寿祝賀訪問の予定でしたが、体調を整えるため入院中の病室でお見舞いの再会でした。休養が十分なのでしょう、とてもお健やか



孔子の墳墓



曲阜孔廟（大成殿）

で安堵しました。「また来て下さい横尾市長」と幾度も話され、後ろ髪を引かれる思いひとしおでした。孔德懋先生や第七十九代直系子孫・孔垂長先生（台湾在住）が重視されるのが「恕」です。孔子の教えの中核のひとつで、「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」の教えが実践できれば、対人関係や世の中ももっと平和で良くなるはず。お二人はその願いを込めておられ、多久もその精神や希望を継承しつつ、さらに精進せねばと感じました。

### 論語塾・安岡先生も聖廟へ

八月には「子ども論語塾」で有名な安岡定子先生御一行が、多久聖廟に來られ、ジュニアガイドの案内に感心されていました。多久市「学びの里プロジェクト」講演の際に聖廟をご覧になり、再訪を希望されたという有り難い御縁に感謝です。

温故知新の実践には古典・歴史は必須と、孔子や茂文公の志に、改めて触れながら、未来志向で学ぶ。そんな志を再認識するのも積累の醍醐味。秋色に染まる中、先人の心、学びの心も感じていただければ幸甚です。

## 公益財団法人孔子の里へ善意の寄付

4月6日、鹿島防災具店代表取締役の大石安兼社長と古賀俊弘営業課長が訪れられ、「孔子の里・多久聖廟の事業に使用してください」と金50万円の寄付の申し出がありました。

公益財団法人孔子の里の重要文化財多久聖廟と周辺地域の歴史文化遺産や自然環境保全の取り組みや人材育成の活動にご理解とご厚情をいただき感謝申し上げます。大切に活用させていただきます。

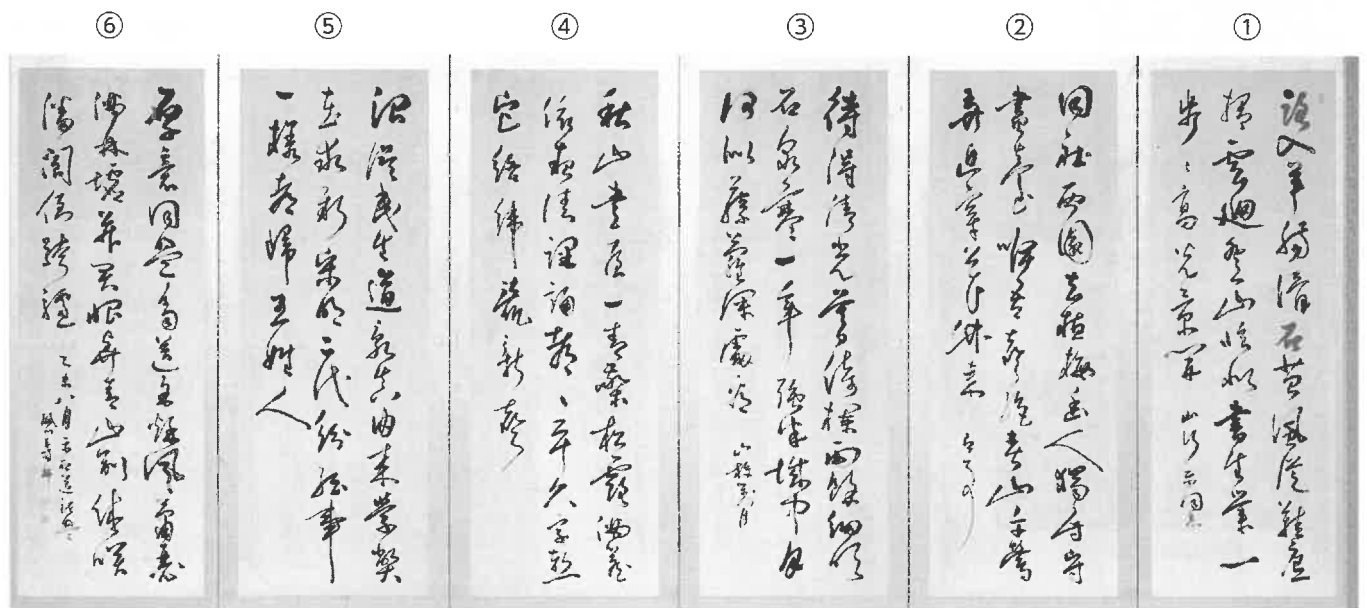


（左から）服部常務、横尾理事長、大石社長、古賀営業課長  
（孔子の里）（鹿島防災具店）

# 山校と草場佩川 七言絶句六首屏風の 背景をめぐって

佩川の会 副会長 尾形 恵子

昨年の草場佩川没後百五十年に際して、多久市郷土資料館では七言絶句六首の六曲一隻屏風（個人蔵）が展示された。一首目が「山行示同志」であることから、親しみやすい思いを抱いてその屏風に對面することになった。他五首もいずれも「佩川詩鈔」に収録されている詩なのだが、二首、三首と辿っていくうちに、この屏風の詩は、ひとつの意図をもって構成されているのではないかと考えるようになっていった。詩はいずれも学問に関わる内容と思われ、東原庵舎教授となった二十八歳から始まり、佐賀弘道館に勤めるようになった四十九歳時の、多久を発つ日の詩で完結している。屏風では詩のあとにその題名が記されているが、題がないもの、また「佩川詩鈔」とは違う題名に変えられている作品があり、一見何気ない情景描写にしか見えない詩もある。しかしこれらの背景に思いを馳せていくと、ひとつひとつの作品が、佩川の身辺の変化と教育者としての心の在りようを映し出しているようだった。いつもながら難解な佩川の詩であり、とりわけなかには手も足も出ないような作品もあったために、この屏風の詩の背景の推察は、まだ自分の心覚えの域を出ないのだが、今回所有者のお許しを得て、鶴山書院の広報誌にご紹介させていただくことにした。



① 路入羊腸滑石苔 風從鞋底掃雲廻 登山恰似書生業 一步歩高光景開  
山行示同志

② 同社西園去植梅 幽人獨向守書臺 吟我聲絕春山午 鶯弄近穿花竹來  
即事

③ 待得清光暮倚欄 雨餘細吹石泉寒 一年強半城中月 何似藤蘿深處看  
山校對月

④ 秋山書屋一青檠 松露滿簷依夜清 深誦都都平久字 慙它絡緯競新聲

⑤ 治誤民生道願真 由來學弊在求新 宗明二代紛然事 一樣都歸王姓人

⑥ 厚意同盟齊送余 輝風簫瑟滿林墟 并君恨與青山別 休咲潘閩倒跨驢  
乙未八月示相送諸盟  
佩川草場轉

漢字	読み	意味
藤蘿	トウラ	かずら
檠	ケイ	燭台
簷	エン	ひさし
慙	ザン	恥じる

絡緯	ラクイ	クダマキ、クツワムシ、ウマオイなどの虫のこと
簫瑟	ショウシツ	秋風が寂しく吹く
墟	キョ	あと、ところ
潘閩	ハンロウ	宋の文人

第一首

山路は羊の腸のようにくねくねと曲がり苔の生えた石は滑る 風は足底から雲を払って吹き廻る  
山に登るのは書生の業と同じで 一步高い所に登るにつれて新しい光景が開けてくる

文化十一年（一八一四）七月 佩川二十八歳、東原庵舎教授長上の任を受ける。吟詠で広く知られている「山行同志示」の詩は、その頃に作られたものである。対馬随行から三年、学問の道は困難でも希望に満ちたものであることを生徒や同僚に語りかけている。「山行」はまた「山校」を指しているとも考えられ、東原庵舎で学ぶ者たちを鼓舞する新教授の詩でもある。

第二首

生徒たちは西園へ梅を植えにいった 世捨て人の私は独り書庫を守る 吟じる我が声も絶えた春山の午後 鶯がすぐ近くで花竹を穿ち遊んでいる

登るべき道にはやはり紆余曲折が待ち受けていた。教授拝命からわずかひと月の後、主君茂鄰（多久家九代）が藩主斉直から隠居のうえ在所引取りを命じられる。二首目の題は「即事」その場の出来事を「即事即詠」したということだが、「珮川詩鈔」には「留守山麓」という題名で、「時育梅園營築之舉使諸生往助事」と記され、梅園營築の時に諸生を作業の助けに行かせたことがわかる。茂鄰はとりあえず下屋敷の西館に入って謹慎していたが、最終的には文政三年（一八二〇）九月、多久に隠居所である梅園新館が建てられている。

生徒たちが梅を植えるために駆り出された日、佩川は独り山校で留守番をした。まるで何事もなかったかのように詩を吟じ、花竹に戯れる鶯を愛でる心を詠じてみせた。「幽人」つまり世捨て人の心境だとうそぶいている。

「附驥日記 西」によれば、かつて、朝鮮通信使応接に向かう古賀精里に随行していた佩川は、長府で茂鄰の発病を聞くなり、精里と仲間の許しを得て、その夜のうちに赤間ヶ関へ急行した。翌早朝小舟で小倉に渡ると、わずか二日で佐賀までの道を歩き通し、茂鄰の容態を確認しに向かっている。幸い病が平癒している様子が安堵して、多久を経由して唐津に向かい、そこで応接使の一行に合流を果たして、無事対馬に渡っている。

佩川は誰よりも主君茂鄰を敬愛していた。茂鄰は佩川を長崎に絵の勉強に行かせた。江戸にも同道して、まるで物見遊山に出かけたかのように各地で見聞を広めさせ、さらに江戸では、古賀精里に入門させている。佩川の才能を愛した茂鄰のその配慮がなければ、一介の郷士にすぎない佩川の対馬随行はあり得なかったともいえる。その大恩ある茂鄰が不運に見舞われ、多久家の凋落が取沙汰されるようになった時、佩川は動じることなく教育に呆けることに決めたのである。世俗に惑わされることなく山校の教育を守ることが、佩川の務めであり、主君への報恩の姿でもあった。

第三首

夕暮れに手すりに寄りかかり月の光を待つ 雨のあとの冷たい石泉はけむるようだ 一年強半ば城中の月を見た まるで深い処に藤蘿の月を見ているようだ。

「山校対月」と題された詩である茂鄰の塾居によって幼い茂澄が多久家十代を継ぐと、佩川の身辺は大きく変わっていく。山校の教育一筋に打ち込むことは許されなかった。茂鄰は茂澄の教育を佩川に託した。茂澄はまず多久から佐賀へ居を移すが、幼少ということでも下屋敷にとどめ置かれ、文政八年（一八二五）に城内の上屋敷に移る。御側番頭を拝命していた佩川には城内から月を見上げる毎日が続いた。ようやく多久へ帰ったある日、山校の手すりにもたれて、雨後の清らかな月を待っていると、心の奥底にあの城内の月の光景が思い起こされた。奇妙なことにそれはまるで、あの杜甫の詩の光景に似て見えた。

杜甫 秋興八首其二、

「請看石上藤蘿月、（請う看よ石上藤蘿の月）」  
「……使命を奉じて筏に乗ったが、虚しく漂った八か月、役所勤めで宿直するはずが、枕に伏し山間の楼閣の垣根で悲しげな声笛を聴く、どうか見えてくれ城壁に絡まる藤蘿を照らす月……」

杜甫は左遷されて思うように仕事もできず、中途半端なまま過ぎてしまった日々を悔恨して、この詩を詠じたとされている。藤蘿とはフジやカズラなどのツルのことで、藤蘿の月というのは、絡み合ったツルを映し出す月の光のことで、どこかに屈折した精神を内包する情景となる。

佩川は栄転して城内に入ったのだが、年若くして藩政に参画した邑主の傍らで徒に気を揉んでいるうちに、毎日が虚しく過ぎた。自分は何の仕事をしたのだろうか。城壁に絡むツタは「しがらみ」というものかもしれない。今はもう山校の清光が遠く思える。

この時期に前後して、「珮川詩鈔」にこともなげに差し挟まれた「陪臣に国命を執る道なかれ」という一詩がある。夜更けに史書を読んでいた珮川は「陪臣に政治にかかわるものではない」と得心すると、厨房に忍び入ってこっそり味噌を舐める。発酵した大豆の豊潤な風味に舌鼓を打ち、これがあれば世の中のどんな「ごった煮」も調えられると詠じている。もちろん「ごった煮」などという下世話な言葉ではなく「四海の羹」と詩的に表現されているが、当時の珮川の四海がはたしてどういうものであったか、それは鍋島齊直と直正という藩主親子、傍らには古賀穀堂、周囲は鍋島家の重臣たち、そしておそらくまだ引くことを知らない若い茂澄。その構図を思い浮かべるだけで、私には城内が恩惑の「ごった煮」に見えてしまうのである。茂澄の師でもあった珮川の苦悩が思いやられてならない。

#### 第四首

秋の山枝の書庫に燭台がひとつ ひさしには  
夜露が満ち清き夜に依る ねんごろに誦す  
なんとなにもかもありきたりの字句 これでは  
新たな声で啼く虫に對しても恥ずかしい。

珮川は再び山校に帰って来た。秋の夜長、書庫に燭台をともし、生徒たちの為した詩に目を通して、ねんごろに吟じてみるが、あまりにも平凡すぎる字句の数々、これが我が山校の詩かと愕然としてしまう。昨今は学問の傾向もすっかり変わってしまったらしい。内心感心はしていないが、この月並み過ぎる句を眺めていると、新しい感覚というものが必要すら覚えてしまう珮川だった。「珮川詩鈔」にあるこの詩は「聞蟲」と題され、ここでは結句は「他所から新しい声を競う虫を持つてこなければ」となっている。

東原庵舎では定期的に「聞詩」が行われ、詩作の出来が競われていたが、その都度珮川は学生の能力の低下を嘆いている。詩作に長けていることは「よく啼く」とも表現された。「我が邑の師儒 幾ばくか善く啼く」と始まる珮川の詩は、「先生の教えの遺沢であり、書院を開かれたおかげである」と結ばれ、東原庵舎初代教授川浪自安の命日に献じられたものである。「よく啼く」生徒が少なくなってしまうことに、意識改革の必要性を感じていた。

#### 第五首

人民に道の真の願うことを誤って認識させる  
のは 新を求めようとする学問の弊害に由来  
する  
宋明二代も末期は殆然とした 一様にすべからく  
王もまた人というものである

「讀史有感」という詩で、蘇軾の「荀卿論」ジュンケイロン」を読んだ感想ということだが、実はこの詩は「珮川詩鈔」巻四のそれも最後から二番目に収録されている詩で、制作時期がやや下がるものと考えられるが、珮川としては第六首(天保六年)以前から抱いていた思いとして、あえてここに書いたとするのは強引すぎるだろうか。さらにはこの詩は「転合本作怪哉晋宋明三代多事都帰云云」という珮川自身の但し書きがあり、「転と結がどうも怪しい」らしく、広瀬窓の詩評がまた「同じ意見である」として添えられている有様で、解釈はとも覚束ない。起句、承句もともすれば回りくどい言い回しに見えるのだが、もしかしたら、あえて誤認を招くような言葉遣いにしたのかもしれないと思う。ただ、この詩にある学弊というものがどういうことなのか、「婆心帖」に記されたひとつの講話を例にとれば珮川の云わんとするところが伝わるのではないかと思う。

それは子鳥なごに餌を与える親鳥の挿絵が描かれた一頁である。昔からの言い伝えでは、鳥は親が年老いて衰えていくと、育てて貰った恩に報いるべく、子が親に餌を運ぶ習性があるとされ、「鳥に反哺の孝あり」として、教育には欠かせない格言とされてきた。明治初期の教科書にまで載せられていた話である。ところが、珮川の生きた時代にはすでに、鳥の生態を観察して、この話は真実ではないと公言してはばからぬ者がいたようである。子鳥に目印を付けてよく調べていくと、子鳥は親と同じくらいの大きさになっても一向に餌を探しには行こうとはせず、ひたすら親の給餌を待っているのだという。そのことに関して珮川は、その者がその師たる人間から、「そのようなことを言い立てて、古人の認識不足を取沙汰するような心立で物理学をするのは心得違いである」と深く戒められたことを記し、「すみぐろに かくは心得べからずと かきても人の とりちがうなり」という和歌を添えて「鳥はこういう風に心得てはいないと、書く人こそ取り(鳥)違えをしている」と、言葉の遊びを交えて人々にさとしている。

物事の真実とはどこに求めるべきものなのか、示唆に富んだ話ではないだろうか。たとえ鳥の生態がどうであろうと、教育者の真実は、親孝行の大切さを教えるということに尽きると珮川は考えていた。いずれにしても「荀卿論」は「放言高論」の典故とされているようで、珮川は思ったまま言いたい放題に論じる風潮を嫌っていた。それを学問の弊害と切り切ったのは、弘道館の教育を念頭においてのことであろう。この詩が仮に弘道館へ移籍してからの作品であったとしても、弘道館教育への違和感は山

校と弘道館を掛け持ちして勤めていた頃から胸に抱き続けてきていたものである。旧態依然として「よく啼かない」山校の生徒では物足りない。しかし言いたい放題の藩校の生徒を前にすると、これはもはや生徒の質の問題ではなく、教育が悪いとしか思えなかった。しかし佩川はその納得しかねる教育の府弘道館にすでに半身を預けていた。

「佩川詩鈔」では東原庵舎は別名「環山楼」とも称されている。多久そのものを「環山郷」と記している例もある。これが佩川独自の表現なのか、また以前からそう言い慣わされていたのかは知らないが、佩川の心の中にはいつもふるさとの山があった。弘道館と兼任することになった時、佩川は「環山楼」の名称をわざわざ「半山楼」と改めている。しかしまもなくその「半山楼」にも別れを告げる日が来る。

### 第六首

みんなが厚意で私を送り出してくれた 学林  
に風は輝き 寂しさは吹き抜けていく  
君と 青山とに別るを恨む 笑うなかれ 潘  
閨は驢馬に逆さに跨って行く

「乙未八月示相送示相送諸盟」と題されたこの詩は、天保六年（一八三五）八月末日、佩川が多久を去る時の詩である。「佩川詩鈔」では「八月晦日辭邑赴佐嘉示相送諸子」と題名が付されている。

潘閨という宋の文人は、八仙のひとり張果老の真似をして、逆さまに馬に跨っては、「潘閨がまた仙人の真似をしている」と人々に笑われたと伝えられている。自分の学問が古めかしいものであることを十分に佩川は承知していた。それでも臆することなく、己れの信じる仙境の学問を唱え続ける覚悟を定めて、この日佐賀に発つことになる。

作中の「君」は蟄居の命を受けた十代茂澄を指している。かねてより本藩への出仕を請われていた佩川だが、多久家は邑の教育が立ち行かなくなることを理由に、佩川の士籍にこだわってきた。おそらく茂澄が承知しなかったのだらう。その主人が身分を失うなり、ただちに佩川の藩への取り立てが決まった。「佩川詩鈔」では、この作品のひとつ前に茂澄への惜別の詩が収められている。

送るは群れ成し 行くは独り

一堂 誰か吾を恨むが如しといえども

明朝 折るなかれ 河梁の柳

直置きて 秋深め枝枯れんと欲す

明日出発の朝、河原の柳を手折らずに、真つすぐに、君の籠る一堂の前に置いていきます。秋も深くなつていきます。心も深く折ることなく直なまま 枯れて下さい

こうして佩川は多久を出ることになった。弘道館での佩川は「前世紀の遺物」と評されたという話も聞く。しかしそれはたんに佩川に時代性が欠如していたからではないと思う。佩川には学問体系にかかわるような著述がない。そのことに関して佩川は、「私の学問は周・商（孔子様のいた頃）の時代のもので、ことさらに書き残すようなものではない」と詩に残している。この屏風の最後の詩が「笑うなかれ、潘閨倒跨驢」であることを見る時、佩川の目指した山の高みが垣間見えてくるようである。この道しかないという信念は、あくまでも主君に仕える武士として現実の諸問題に関わりながら、さまざま葛藤の中で培われていったものだと思う。一曲毎に映し出される教育者佩川の姿。佩川はこ

の屏風をいつたい誰のために残したのだろうか。東原庵舎か、またはそこに関わる誰か興味は尽きないが、いずれにしても、没後五十年を契機としてこの屏風の存在が明らかになったことに言い知れぬ喜びを覚え、また所有されている方が佩川の会の会員で、多久で教職を勤められているという偶然にも深く心を惹かれ、無謀にもこの稿を試みることにした。

## 第2回 多久百景 写真コンテスト 表彰式のご案内

～あなたの写真が多久百景に～  
(毎年20作品・5年間で百景を認定します)

テーマ 多久の四季・伝統文化・歴史

日時 平成30年10月28日（日） 12:00～  
場所 多久聖廟展示館  
内容 賞金、賞状の授与

秋季積葉の同日、28日（日）に開催します。

コンテストには、市内外から195点のご応募をいただきました。その中から見事入賞を果たした約20作品は、多久聖廟展示館に展示いたします。昨年度の受賞作品とともに楽しみください。どうぞ積葉当日は、聖廟展示館にも足を運んでいただき、改めて多久の魅力を感じてください。



# 多久市民の翼・中国紀行

佐賀県日中友好協会会員

佐賀市 横尾 章

〈逝く者は斯くの如きか、昼夜を舎かずし。孔子が旅の途中、河川を目にし、もらした言葉という。『論語』にある一節で、川の流れのように、人も時も全てが過ぎ去っていく。昼も夜も絶え間ない。日夜徳を学ぶ者を励ましたものとも解釈されるが、不遇だった自らの人生に重ねた心境ともとれる。悠久の歴史を刻む中国のスケールの大きさをも想起させる。

その孔子の生誕地、山東省曲阜をいつか訪ねてみたいと思っていた。七月、「多久市民の翼」への参加で従来の願いがかなった。一九九三年の多久市と曲阜市との友好都市締結から二十五年の節目。福岡空港から上海に飛び、高速鉄道乗り継いで曲阜に到着したのはすでに夜だった。上海からわずか四時間足らず。かつての訪中団は夜行列車で行っていたというから、めざましい進歩だ。

曲阜は人口六十万ほど。街はどこかしつとりとして緑が濃く、まだオート三輪車が走るなど、地方都市の雰囲気だ。「発展する前の昔の曲阜が好き」。そうもらしたのは、一九八四年の第一次訪中団員だった尾形節子さん(多久日中友好協会理事長)。多久は民間交流の歴史の方が長い。その協会設立は三十五年前である。草の根にも支えられた友好交流は全国に誇れるといえる。

さて、最初に訪れたのは世界遺産の「孔廟(孔子廟)」。孔子直系子孫の邸宅「孔府」、孔子一族の墓地「孔林」。紀元前四七九年、故郷の魯に今の山東省でその生涯を終えた孔子は、弟子たちによって

葬られた。魯の君主哀公は、孔子生前の家を改築して廟(先祖を祀る建物)とした。

孔廟は南北一キロという壮大なもの。明の時代の城門をくぐって進むと、両側には柏の大木が続く。「論語」に「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るを知る」とあるのを思い出す。冬になって初めて松や柏が枯れないで残ることが分かるように、人の真価は苦しい時にこそ現れるという教えである。

この後に、一行は曲阜市政府への表敬訪問にも臨み、両市による記念植樹は今も曲阜のシンボルである柏の木だった。

孔廟の正殿「大成殿」は、中国の三大宮殿建築の一つ。中国全土からの子どもたちで、ごったがえしていた。「成績が上がりますように」「試験に合格しますように」。そんな願いが聞こえてきそう。

ここで、私たち訪中団のために、曲阜市政府の粋な計らいがあった。孔子祭の時にしか奉納しない釈菜の舞を特別に披露してくれたのだ。太鼓が打ち鳴らされ、長細いラッパの音が響く。いにしえからの風格が漂う。緋の衣をまとった十代とおぼしき女性たちの美しい所作に引きつけられた。手厚い歓迎は、このところ改善しつつある日中関係をうかがわせる。「多久の聖廟はこの分家やけん、本家に来られただけでも幸せ」。団員からもれたつぶやきに意を同じくする。

この旅の目的の一つは同じ山東省にある聖なる山、泰山(一五四五メートル)の登山である。中国五岳の筆頭で、東中国で最も高いとされるこの山を、私も楽しみにしていた。秦の始皇帝ら歴代皇帝が、この山で行ったのが「封禅の儀」だ。新しい王が国を治めよとの命を天から授かり、「受命」した王は、太平の世が続くよう、しっかりと身を慎み、天地を祀ったという。

泰山の入り口は巡礼の老若男女でいっぱい。麓か

らの石段は七千段もあり、歩いて登れば一日かかる。そこで頂上近くまでロープウェイで行くのだが、乗ってみれば怖いほど高所を通り、スリル満点であった。

ロープウェイの終点「南天門」。少し霧が出ていて、まさに天空に届かんという心持ちになる。李白の詩「泰山に遊ぶ」の一節が浮かんだ。〈天門にて一たび長嘯すれば、万里 清風来る〉。南天門に立つて詩歌を口ずさめば、万里の彼方から清らかな風が吹いてくる。

この山は道教信仰の中心で、ほこらの前にひざまずき一心に祈る人々の姿がある。何を祈るのだろうか。生病老死…。いつの世も人の悩みは尽きない。だが下界を眺めていると、俗世間を離れて仙界に遊ぶような悠々たる境地となった。

この後、団員は北京に足を延ばす。孔子の第七十七代子孫、孔徳懋さんと会うためだったが、一〇〇歳を超える女史は体調がすぐれず、夕食会への出席はかなわなかった。それでも五日間の旅で、友好交流の足跡は確かにしるせた。



泰山を望む



孔廟での釈菜の舞

## 與に共に学ぶべし (論語から献詩へ)

賛助会員(福岡市)

野口 康子

二十数年前、未熟な思考を確立できずにいた私は、ふと目にした「論語講座」の案内に魅きつけられ出かけた。当時、九州大学名誉教授だった故岡田武彦先生との出会いになった。岡田先生が含蓄のあるお話をされる度、熱心にメモをとった。東洋哲学とは、孔子さまの教えとは、と月に一度の受講が楽しみになった。受講生の大半は私より年長の女性が多かったが、お誘いして受講後に先生を囲みお茶会を催すことも慣例化した。今まで未知の世界だった儒教に少しづつ足を踏み入れ始めた。

十代の頃から詩吟を続けていた私は、漢詩に親しみを持っていた。だが、自らが詩作を、と考えたことはなかった。ある日、北九州の詩吟仲間男性から自作の漢詩を見せていただいた。もしや私にも作れるのでは、と書物を漁り独学で完成させた一作をお世辞で評価してもらった。それ以来、漢詩を作ることに大きな喜びを感じている。愚作でも、その作る姿勢や過程を大事にしたいと思うようになった。

そして、福岡市内の某公共施設で見かけた多久市のパンフレットに「釈菜・漢詩奉納」の文字を発見。孔子の里に問い合わせたら、誰でもいい、とのこと。秋季釈菜用のメ切り寸前の夏の日だった。私は身心を清め、かつて拝廟した時を静かに思い出しながら詩作した。後に、孔子の里から送付して下さった立派な冊子に大先輩の献詩者らと共に自分の詩を清書されているのを見、大感激したのは忘れられない。以後、献詩は続けている。

多久聖廟を訪れる度に新たな発見や人々とのふれ合いがあり、何度も足を運びたくなる。三人の女性との邂逅は思い出深く、学ぶ意欲につながっている。故細川章先生は、論語講座仲間で、ある大学教授の奥様からお名前を聞いていた。とても立派な方だ、と。十数年前の春季釈菜で、孔子の里の男性が紹介して下さり始めてお会いでき感激した。今なお記憶に鮮明に残っている。穏やかで上品なお姿に敬服した。手紙の交流ののち、他界された事を知り大変残念に思った。贈呈して下さった先生のご著書は私の宝物だ。

二人目は聖廟近くの小学校の校長だった市丸悦子先生。釈菜終了後に東原座舎で休憩させていただいた折に知り合って、色々とお話をうかがった。そしてご自分で監修された「論語カルタ」の本を買いて、私に贈って下さった。初対面だったのに、何とお心のやさしい方、と感謝した。一年以上前、偶然にも釈菜で再会、お互いになつかしさがこみ上げ大変うれしかった。多久を愛する思いは相通じている。

三人目は書道家の副島瑞泉先生。私たちが献詩した作品を丁寧に毛筆で書いて下さった方だと知った。漢詩の作り手が漢字一字にこめる思いは熱いが、それを理解して正確に筆を運ばれ、頭の下がる思い。漢詩に用いる漢字は、俗字や古字・本字ではいけない、正字でなければ等と規則が複雑だ。その漢字を美しく書かれるのは献詩や釈菜そのものへの敬意の表れで、すばらしいことと思う。陰で支える方のご尽力を思い、少しでもいい献詩が作れるよう精進せねばならない。

前出の詩吟仲間だった男性は現在、北九州漢詩連盟に入り、私は単独で詩作する。私が釈菜への献詩を案内したら、他の人にも声をかけて下さり、献詩の輪が広がった。また、孔子の里の職員も漢詩を作り始められた、と知り大変喜んでいられる。切磋琢磨しながら、儒教のおしえも学んでいきたい。「與に共

に学ぶべし」である。「論語」の子罕篇第九に出る。論語の解釈は多様だが、私は多久聖廟の釈菜で出会えた多くの方々と共に色々な事を学んでいこう、との思いをこめる。原点は「仁」で、第七十五代直系の孔祥林氏に私の所蔵する論語の本に揮毫していただいている。

## 多久聖廟 秋季釈菜・孔子祭のご案内

日時 平成30年10月28日(日) 10時30分～13時10分

場所 多久聖廟

執事・伶人 入場	10時00分～10時20分	④ 幼児太鼓	11時50分～12時00分
献官・祭官 入場	10時20分～10時30分	⑤ 花棒舞	12時10分～12時20分
① 釈菜(せきさい)	10時30分～11時30分	⑥ 孔子の里腰鼓	12時20分～12時35分
② 釈菜の舞	11時30分～11時45分	⑦ 釈菜の舞	12時35分～12時50分
③ 参列生徒の唱歌	11時45分～11時50分	⑧ 孔子の里獅子舞	12時50分～13時10分

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承ください。

## この、時代の変わり目に

賛助会員 和光大学教授

東京都町田市

岩本 陽児

私は二〇〇二年から、十年過ぎた英国を引き揚げて、東京・町田市にある和光大学という文系三学部の小さな、ユニークな私立大学で、社会教育・生涯学習の教員をしています。本年五月末に、三泊四日の日程で多久を訪問。二十七日に秀村選三先生の臨席を得て開催された古文書の村の大寄合をメインに、現・孔子の里常務理事、服部政昭さんに変お世話になりました。懐かしく、濃密な時間を過ごすことができました。感謝に堪えません。

九州大学に一九八二年に入学した私は、教養部の歴史資料館「玉泉館」で秀村先生の「古文書を読む会」と出会い、多久との往来がはじまったのはそのご縁でした。

あれから三十年。

佐賀空港で待ち合わせた服部さんは、私の記憶する「たんきゅう会」で丹邱の里創りに汗を流していた三十代の服部さん)の、おじいちゃん? かく申す私は：言わぬが花ということにしておきましょう。

私は高島炭鉱に生まれました。台湾引き揚げ者の家庭です。小学校五年に上がる時、父が肩たたき(リストラ)に遭い、福岡に転居しました。大学院に在籍中だった一九九一年秋に英国に留学するまで、福岡で育ちました。

先年物故した両親が、嬉野の老人ホームにお世話になっていたので、大学の休暇を利用して両親に顔を見せに行った折、いろいろな意味で話題となっていた武雄のツタヤ図書館に足を伸ばしたことがありました。地図を眺めていて、武雄から多久は

近いぞと、タクシーで山ひとつ越えました。細川先生はお留守でしたが、隣人、多久人形の倉富さんにお声掛けしたら幸いご在宅。多久市立病院に送り届けていただいて、細川先生を見舞うことが出来ました。先生は開口一番「あの頃がいちばん楽しかったですね!」武雄の図書館を見たのだったら、ぜひ伊万里の市民図書館を見てください」。その約束を果たしに次の休みに伊万里に行き、そこで図書館長から、細川先生の訃報を聞かされたのでした。思いは尽きません。

さて、今般、私と多久のご縁を結び直してください。たのが、横尾市長さん。学生・院生時代に「たんきゅう会」のお手伝いで、曲阜の「杏壇」を多久で再現しようと福岡の植木市でアンズ苗を買い求めては不二見達朗先生と聖廟近くに使せと穴を掘って植え付けていた頃、松下政経塾からいずれ、多久のために戻って来る期待の星としてお名前を伺っていたのが横尾さんでした。

あれから三十年。

文部科学省に、大臣の諮問機関「中央教育審議会」というところがあります。そのひとつに、私が現在、大学で講じている分野に直接関係する「生涯学習分科会」があり、その分科会が本年、二〇一八年二月に「ワーキンググループ」を立ち上げたのでした。ワーキンググループの検討課題は、「公的社會教育施設の所管」に関するもの。横尾さんは、そのメンバーで、たまたま傍聴に行った私は、かくかくしかじかの者でとお声をかけて、服部さんにつないでいただいたのでした。ありがたいことです。

敗戦後に日本国憲法・教育基本法が整えられた時の基本的な制度設計は、戦争の惨禍を繰り返さないために、教育行政を、独立行政委員会のひとつである教育委員会のもとにおき、四年ごとの選挙で選ばれる首長からは相対的に独自の立場を保障する(首長が選挙で変わるたびに教育政策が変わったのは、たまたまのものではない)ということがひとつ、

もうひとつが、子どもの学校以外に、図書館・公民館・博物館を社會教育施設として、学校を終えた後も学びたい人が学べる環境づくりを国および地方公共団体の責務として、国民が賢くなることに価値を置いたことでした。独立行政委員会は他にもあり、有名どころでは、間接民主主義の根幹を担う選挙管理委員会、食糧安保に責任を持つ農業委員会、市民の平穏な暮らしにかかわる公安委員会などがあります。

私は院生時代に、英国留学の先輩でいま母校九大の教師をしている同級生から、「サバイバリズム」という言葉を教わったことがありました。マーガレット・サッチャー時代の英国で聞かれるようになったことがらです。わたしなりに翻訳すると「儲かりさえすれば!」。ものづくりの時代を終えた本邦は、バブル崩壊以降長らくデフレに苦しみ、私など英国に行くたびに物価高に辟易するのですが、逆に、海外からのお客様にとって本邦は物価が安く、お買い物天国なのかもしれません。そうした背景のもとで社會教育施設を首長部局に移管したら集客が見込まれ「まちづくり」がうまくいくのではとの期待があるように見えます。すでに、教育委員会と首長の風通しを良くすることを目的とした「総合教育会議」も始まっているのですが、あれは何だったのでしょうか。制度が変更されて実際どうなるかは、こればかりは分かりません。しかし、国民の絶大な支持を得ている現政権が、そのような制度設計の大変更を進めているのは間違いのないことです。

公共図書館が教育機関であることをやめるとは? こうした状況を、図書館司書だった泉下の細川先生はどうご覧になっているのだろうかあと、お尋ねしたい気持ちでいっぱいです。



『水江事略』(翻刻文) 紹介 2

多久家文書

長信公譜一 天文十四年己巳ヨリ弘治三年丁氏巳ニ至ル

水江事略卷之二 長信公譜之一(上)

水江第四世龍造寺和泉守長信公御法名天理元心山主

天文七年戊戌水江東館ニテ御誕生御父ハ六郎次郎周家

公御母ハ慶間夫人龍造寺刑部大輔胤和公ノ御息女ナリ

公御幼名慶法師君御元服有テ采女正家信又彈正正忠兵庫頭

後和泉守長信公ト改メラル(信ニ述ニ作ル)

天文十四年己巳 御年八歳

正月馬場頼周等カ逆意ニヨリ御曾祖父剛忠公ニ從テ筑後

二赴キ玉フ四月水江ニ御歸九月剛忠公ノ命ニ依テ御祖父

家純公ノ御遺跡ヲ嗣キ中館ノ主ト成セ玉フ榎三十町八元

ヨリ中館ニ属ス其余袋新郷木原竹藤古閑南里鹿子末次等

ノ村々皆家純公ノ所領ニシテ我公是ヲ承テ最初ニ知行セ

ラル所ナリ御祖母玉洞(家純公ノ御室浦原氏(浦原佐渡守秀家

周家公ノ御母ナリ) 御亡夫家純公ノ御遺跡ヲ公ニ譲リ玉フ其

状ニ云

家純ノ館屋敷一ヶ所

居屋敷三十一ヶ所

片田江分四町三反

牛嶋二町三反

新郷三町三反

木原の内三反

牧の内料足一町

下大崎四反

山王給仁反

ひのめ四反

寿篇で以上十二町

天文十四年乙巳九月二日 うほふ 玉洞

慶法師殿 譲り進上候

此御讓状本書ハ假名ナリ坪付別紙有リ今是ヲ載セス

家純公館屋敷一ヶ所

一ヶ所中牟田忠次郎居屋敷

江口太郎左衛門尉

鷺崎新四郎

藤孫左衛門尉

光富新四郎

松尾新三郎

吉岡清左衛門尉

水町忠三郎

古閑源兵衛尉

江副仁兵衛尉

中溝藤四郎

尾田善兵衛尉

田崎神六

森藤七兵衛尉

彦右衛門尉

清兵衛尉

堤善兵衛尉

以上三十一ヶ所

南ノ馬場見穂分ナリ福地右衛門尉前ノ堅堀ハ東ノ内ナリ

江副神兵衛尉東ノ堀ハ西ノ内ナリ

以上假名書ノ本書

龍造寺ノ内

一所居屋敷

片田江ノ内

一所三段

安住ノ内繁昌田

一所六段

安住ノ内繁昌田

一所六段

安住ノ内蓋附

一所三段

一所八段三丈

次郎兵衛給 江嶋殿

北嶋孫八郎給

本庄ノ内燈油免

一所八丈

七郎左衛門給

以上二町二段一丈

二郎兵衛給

同居屋敷三段

以上本書假名

剛忠公石井藤兵衛尉(後尾張)村山内蔵助西岡丹後守鷺崎

主殿助等ヲシテ公ノ補佐タラシム

或記ニ云家純公ヨリ周家公ニ御附属ノ御家臣鷺崎長門

石井尾張木下十郎福地右衛門吉岡上総江副喜泉古閑對

馬ノ七人ナリト

天文十五年丙午 御年九歳

三月十日御曾祖父剛忠公卒セラレ

同十六年丁未 御年十歳

今年春夏ノ比龍造寺ノ惣領宮内太輔胤榮國ニ歸ル千葉介

胤連ト兵ヲ合セ少貳冬尚ヲ伐ツ冬尚盛福寺ノ城ヲ棄テ筑

後ニ奔ル大内義隆胤榮カ合戦勝利ノ功ヲ賞シテ新地六千

町ヲ加増シ當國ノ守護トス是金公ノ旧例ニ依ル所ナリト

云

家系事蹟

幸府ノ守護代杉豊前守隆連大内老臣陶尾張守相良遠

江守肥前ニ発向ス千葉胤連龍造寺胤榮先陣トシテ城

原ヲ攻ム民部太輔隆胤(隆公初ノ御名)胤榮ニ謂テ

云我此城ヲ見ルニ其氣散乱ス急ニ是ヲ攻ルモノナラ

ハ必ス利アラシ胤榮尤ナリト軍ヲ進ム隆胤鑑兼先登

シテ城ヲ陥ル冬尚筑後ニ逃ル是隆胤初陣ノ戦功ナリ

大内義隆龍造寺ノ勲功ヲ賞シテ感状ヲ賜ヒ肥前一國

ノ守護代トシテ六千町ノ地ヲ加増ス

合戦勝利之由神妙ニ依所望之地肥前國之内佐嘉郡の内

五千町神埼郡の西郷五百町三根郡の内下村二百町坊所三

百町の事所宛行二楯以可被抽忠節之状如件

四月廿二日 義隆判

與一右衛門給

龍造寺宮内太輔殿

同書

秋七月冬尚大友氏ニ依テ肥前ヲ復セント謀ル旧好ノ士大半是ニ應セ胤榮鑑兼一族奮発シテ東肥前ヲ征伐ス敵競テ諸々ニ戦フ討捕ル數十注文ヲ以テ大内氏ニ送リ感状アリ隆胤武略ヲ以テ和議ヲ調フ

八月二日龍造寺豊前守胤榮軍ヲ率テ小城表ニ発向シ千葉胤頼(冬尚ノ弟)ト平井村ニ戦フ龍家ノ軍利ヲ得テ千葉衆仁戸田刑部太輔以下小城ノ郷士數人ヲ討打テ歸ル有馬晴純ノ軍多久ヨリ牛ノ尾ニ至ル蘆刈ノ城主鴨打氏はヲ討破ル

小田政光高木鑑房犬塚鑑廣等同陣ニシテ牟田ノ前ニ於テ大内衆ト合戦ス二將敵ヲ破テ利ヲ得タリ冬尚政光ヲ賞シテ駿河守トシ鑑房ヲ能登守鑑廣ヲ伯耆守トスカクテ少貳衆ト大内方ト處々ニ合戦シ國人安穩ナラスト云々

秋八月水江圓藏院豪覚法印ノ石塔夜ナ火ヲ發ス諸人大ニ是ヲ怪シム水江ヨリ諸宗ノ高僧ヲ請シテ是ヲ消セトモ止マス爰ニ龍雲寺大用和尚トテ大徳ノ知識アリ命ニ依テ来リ塔火ニ向テ挨拶シテ曰種々ノ幻化生乎覚心即今幻盡覺盡時如何又自ラ代テ曰如薪盡火滅ト火焰則チ消ユ時二侍者杖ヲ扱テ曰焼火杖亦無用矣是ヨリ大用和尚ノ法徳大ニ顯レ水江ノ一家曹洞宗ヲ歸衣シ洞派ノ寺院繁昌セシハ此時ヨリノ事ナリト豪覚法印ハ家純公ノ御次男其公ノ叔父ナリ寶琳院ノ住職ニシテ圓藏院ハ其遷化ノ地ナリ

傳二曰天文七年ノ春豪覚病氣ナリシカハ金公深ク愁ヒ玉ヒ寶琳院ヨリ御引取有テ水江ノ倉屋敷ニ置カル厚ク御看病アラントノ御事ナリシカトモ御養生ノ驗ナク三月三日終ニ遷化ナリ剛忠公家純公御歎キノ餘リ則チ其地ニ葬ラル其後天文十四年家純公周家公純家公等ノ塔モ此地ニ建ラレ寺院トナシ圓藏院ト名付ラル

天文十六年秋冬ノ比水江ノ惣領分鑑兼ト西方ト御不和ノ事起リ鑑兼水江ヲ立去ラル胤榮慶間ニ二御歎キ有リ

テ又本館ニ歸リ入ラル其事ノ始末詳ナラス故ニ此ニ載セス

鎮西志 龍造寺孫九郎鑑兼同姓西ノ館ノ一族ト所領爭論ノ事ニ依テ不和也鑑兼居館(水江東ノ館剛忠ノ居跡)ヲ去テ龍造寺ニ行キ惣領職胤榮ニ頼ム胤榮ハ姉婿ナリ

此時龍造寺ニ三家有リ村中龍造寺與賀龍造寺水江龍造寺ナリ村中八家ノ正統ナリ村中八十町ヲ境内トス城郭方八町ナリ郭ニ三段アリ巷陌相分ル本郭ハ今ノ諫早家ノ邸ニアタリ二郭ハ多久家ノ邸ニ當ル三ノ郭ハ矢張今ノ三ノ丸ナリ或云今ノ三ノ丸ハ鍋嶋家ノ建ル所何ソ龍家ノ三ノ丸ナランヤ然トモ五年庚子ノ冬柳川出陣衆議ノ時三ノ丸直茂ノ館ニ會議ス其所今ノ三ノ丸ナリト云今ノ御城ノ成就ハ慶長十三年ノ間ナリ三ノ丸名此時ヨリ前ニ在リシ事知ルヘシ

鎮西志 竜造寺八幡宮ト高寺トハ(高寺ノ号竜造寺ナリ)今ノ武雄家ノ邸ニ當ル隱岐守家貞ノ子孫胤榮惣領トシテ一族是ヲ守ル是ヲ村中ト云フ與賀ハ前豊前守胤家ノ子孫伊豆守常家日向守家重播磨守家親等一族群居ス水江ハ牧三十町ヲ下略

三月十一日胤榮水江ニ告テ老臣石井藤兵衛尉忠房(後尾張)ヲ召テ鑑兼ノ事ヲ謝シ和順ヲ其姉ニ演達セシム姉ハ周家ノ後室隆胤長信等ノ母ナリ大方ト稱ス慶間ト号ス慶間ノ父ハ刑部太輔胤和(和或ハ員二作ル)母ハ妙因同姓豊前守胤家ノ女ナリ慶間等ノ四女ヲ生ム胤和早世又其弟大和守胤久ニ嫁シ胤榮ヲ生ム故ニ慶間ト胤榮トハ同腹ノ姉弟ナリ故ニ姉公ト稱ス

爰ニ於テ西ノ族論地一分ヲ避テ其和議ニ應ス鑑兼本館ニ歸ル其始終胤榮ノ牒ニ現ハル其文ニ

昨日藤兵衛尉(申候題目)いか、御分別候哉違も鑑兼御事きたて参らせ候間無餘義可有御分別候彼御身早々落着候様有度候此義にて支へ参らせ候御心得為に申参らせ候只彼違ひ事ハせし捨られ則忠に對し思召寄らるへくよくよく昨日

申参らせ候条不委候かしく  
三月十二日 豊前守 大ね榮  
あね様 人々申給

鑑兼御身林の事則忠御筋目ゆへと不そやと存し候故種々六ヶ敷事申追て所かの下知の分御ざり候由承り日出度候く速く速則忠御居やしとど犬の臥土とを候ハ、我等見度くこと口惜しく候ゆえの事二候彼の心中に情残而義候ハ、いよいよ可然不に等御分別有届く候猶言葉に申下よし

猶々五れなく聞召分ら達忝候又忠節も不忠も入ざるの由に候忠節社きたて参らせ候由存候へ免角御ミつからにて申上度候  
あね様 豊前守 大ね榮  
御返事給

同十七年戊申 御年十一歳  
春三月二十二日佐嘉ノ城主龍造寺豊前守胤榮卒セラル御年二十四法名賢譽徳公無量寺ニ葬ル長信公ノ御母慶間夫人ノ同腹ノ御弟ナリ一女有テ男子ナシ惣領家已ニ絶ントス一族老臣輩相集テ御世嗣ノ事ヲ詮議セシカトモ衆議マチマチニシテ定ラス時ニ一族龍造寺播磨守家親ノ申サル、ハ我日夜是ヲ按スルニ當家ノ惣領ヲ相續スヘキ器ニ當ルモノナシ水江ノ隆信右衛門太輔家就胤門ノ子越前守兩人コソ其器ニ當レリト云フヘキカ所詮此兩人ノ内ハ八幡宮ノ御嗣ニ任センヨリ外ナシトノ事ナリシカハ皆々其義然ルヘシト同心セラル仍テ吉日良辰ヲ擇ヒ八幡宮ノ寶前ニ於テ御嗣ヲ取ラレシカ御嗣三タヒトモ隆信公ニ當ル是ニ依テ城中ノ老臣等水江ニ來テ隆信公ヲ迎フ隆信公ニ當ル中ニ移ラル又胤榮ノ後室諸老臣ノ勸ニ因テ隆信公ニ嫁セラル是家門公御息女ニテ鑑兼ノ妹ナリ爰ニ土橋加賀守和貞ト申モノアリ龍家累代ノ臣ニシテ殊ニハ胤榮ノ元老ナリ此モノ一人隆信公ノ當家ヲ嗣玉フ事ヲ悦ハス或ハ後室

二讒シ或ハ鑑兼ニサ、ヤキ隆信公ヲ退ンコトヲ謀ル  
同十八年己丙 御年十二歳

此頃隆信ト御不和ナリ是ハ土橋カ謔言ニ依テナリサレト  
モ老臣龍造寺播磨守小河筑後守

サマサマ諫言申セシニ依テ無事ニ調リシト云

鎮西志 龍造寺播磨守家親深ク是ヲ歎キ其妻ヲシテタ  
ヒラヒ婦人ヲ諷諫セシカトモ聞入玉ハス愛ニ於テ筑後  
守榮純(後信安) 或日御機嫌伺トシテ婦人ニ見ヘテ申

御姫様御オトナシク御生長遊ハサレン某鳥度見参ラセ  
ン婦人容易キコトナリトテ左右ノモノニ仰ラレシハ  
姫君順テ出玉ヒシカハ筑後ヤオラ御手ヲ取テ近ク引寄  
セ参ラセ泪ヲタラタラト流シ申ケルハ扱モ御果報 キ

御生ナリ千歳ノ齡モ保タセ玉フヘキ御身ノ漸々御三ツ  
ノ今日只今臣某手ニ懸奉ル事宿運ノイタス所是ヲ恨ミ  
玉フナト脇サシヲ抜放シ御胸クラヲ捉ヘ既ニ斯ヨト見

ヘシカハ女中共ハ周章フタメキ婦人モ共々筑後ニ取ス  
カリ是ヲ支ヘ婦人ハイラ立血迷フタルカ筑後守其子ヲ  
トラヘテ何ヲソスル其時筑後答テ云臣某狂氣モ致サス

聊カ忠節ノ為ニテ候御聞アレ某カ所存巨細ニ言上仕ラ  
ン抑君ハ正敷家門公ノ御息女當家ニ於テ上ナキ御方御  
婿君ハ周家公ノ御長子君トハ親數御縁ナリ故胤榮公御

早世マシマシシテ御世嗣モマシマサス御家ノ御血脉絶  
ン事ヲ歎キ衆議一決シテ婿君ヲ迎ヘ奉ル君ノ元ヨリ知  
シ召ス所然ルニ只今御ニ方御中惡敷マシマシシテ當家

ニ敵スル豊後ヨリハ此上ナキ計策ノ坪ニシテ家中分レ  
テニチト成大半ハ豊後ニ内通シテ婿君ヲ誅セント謀ル  
當家ノ滅亡日アルヘカラス然ル時ハグワンゼナキ姫君

捕ハレテ豊後ニ行キ大友ノ手ニ渡リ玉ヒ龍造寺ノ嫡女  
カスノ通りト嘲弄セラレ玉ハン事當家ノ恥辱末代ノ瑕  
瑾此上ヤ候ヘキ爰ヲ以テ某姫君ヲ敵ノ手ニ渡サンヨリ

臣ア手ヲ懸奉リテ代々御家ノ御重恩ヲ報シ奉ン所存ニ  
テ候ト申セシカハ婦人ハ初テ其志ヲ感シ玉ヒ扱ハ深切  
ナル次第ナリ我争テカソナタノ異見ニ違ハン今ヨリ以

後夫婦和順ノ事氣遣ヒアルナトノ玉ヒシカハ筑後ハ今  
更泪ヲオサヘ恭數首ヲ下ケ有難キ夫人ノ仰セ誠ニ當家

万歳ノ基ナリ努々御異變成シ玉フヘカラストテ其場ヲ  
下リケル夫ヨリ一族異議ニ及ハス暫ク事モナカリシト  
ナリ

同十九年庚戌 御年十三

春三月十九日(或記ニ天文二十一年壬子三月二十六日トス)玉

洞祐金大姉掩粧セラレ

圓藏院ニ葬ル蒲原左馬助ノ息女ナリ家純公ノ御室周家公  
ノ御母隆信長信ニ公ノ御祖母ニ

テ長信公殊ニ我家ノ御祖母ト敬尊セラレ

秋七月長信公大内義隆ノ吹舉ヲ以テ御元服有テ采女正ト  
成ラセラル家信ト御名乗御舎兄民部太輔隆信公山城守ニ  
任ラル、同時ナリ

八月十一日長信公ノ伯母花溪正春御卒去是ハ家純公ノ嫡  
女周家公ノ御姉鍋嶋駿河守清房ノ夫人加州直茂公ノ御母  
ナリ

土橋加賀守和貞ハシメヨリ隆信公ノ惣領職ヲ嗣セラルル  
事ヲ肯ハサリシカ其心弥募リ婦人ト鑑兼ニ申込ミ又城持  
ノ輩十九人ヲカタラヒ隆信公及ヒ長信公ノ御一家ヲ討亡

ン事ヲ謀ル龍造寺鑑兼(孫九郎又左衛門佐) 水江東の館二居  
リ兼テ長信公ヲ退ケ我水江東西ノ采地ヲ并セ領セント巧  
ミ兵ヲ起シテ不意ニ長信公ノ御館ヲ取圍ム長信公ハ微勢

ニシテ防キ難ク援ヲ隆信公ニ乞ハントセラレシカトモ城  
中ヘノ通路絶テ申贈リカタク如何ハセント御一家相集テ  
詮議マチマチナリ時ニ壽藏主ト云小僧アリ年十七八(木下

伊豫守覺順ノ子)進ミ出テ曰某御状ヲ城中ニ傳ヘ申サン長  
信公大ニ悦ヒ一封ノ書状ヲ壽藏主ニアタハラル壽藏主是  
ヲ竹ノ皮ニ包ミ首ニ懸テ難ナク堀ヲ泳キ越ヘ城ニ入テ隆

公ニ達ス隆公即御返書ヲ認メ是ニアタハラレシカハ又々  
泳キ回りテ長信公ニ達ス佐嘉水江一統ノ後御兄弟壽藏主  
カ今度ノ手柄ヲ賞セラル後光圓寺ノ開山トシテ仙叔長老

ト云シハ此人ナリ

山城守隆信公城中ヨリ来テ水江中ノ館ニ入ラセラル一族  
家臣附従者多シ扱鑑兼カ一族東ニ起リ竜造寺日向家重(盛  
家ノ子) 伊豆守常家備後守鎮家伊賀守家直(胤門ノ嫡子) 右

兵衛太輔家就新左衛門尉胤直土橋加賀守和貞西岡美濃守

榮貞高木能登守鑑房小田駿河守政光神代大和守勝利馬場  
肥前カミ鑑周及横岳姉川本告犬塚江上武種八戸宗暢鴨打  
徳嶋等軍兵一萬斗リ或ハ小貳冬尚ヲ大將トシ或ハ千葉胤

頼ヲ將トシ且ハ大友ノ威風ヲ假テ水江ヲ取圍ム使ヲ城中  
ニ遣シ云入ケルハ若異義ナク城ヲ去渡サル、モノナラハ  
衆中トシテ君家ニ訴ヘ隆信長信等命ハ安穩ナラシムヘシ

ト云々隆信公大ニ怒テ曰汝與黨ノ奴原非義非道ノ企シテ  
我等兄弟ニ迫ルトモ我何ソ身命ヲ惜テムザムザト當城ヲ  
渡サンヤイザ死ヲ極メ戦ヒヲ決スヘシト既ニ使者ヲ切捨

ントス使者這々ニ逃歸テ此体ヲ申ス衆中評議マチマチナ  
リ神代勝利手勢三四百ヲ引具シ城門ニ来リ小河筑後守ヲ  
呼出シ腰刀ヲ投出シ館中ニ入我年老ト云ヒ旧好ト云ヒ隆

信公ニ見ヘテ直々ニ談スヘシ事ノ候謁見ヲ許サレヨト請  
フ筑後は隆公ニ申ス隆公對面スベシ是ニ通セトアリケ  
レハ勝利隆公ニ謁見シ低頭平身主人ニ見ユルニ異ナラス

隆公先御言葉ヲカケラレイカニ勝利兼日ノ首尾相違ナク  
只今ノ入来甚以珍重ニ候先御茶参ラスベシ時ニ鍋嶋孫四  
郎(清房) 次男後加賀守直茂今年十三ナリ

御側ニ有シカ自ラ立テ茶ヲ持来テ勝利ニ進ム勝利辱シト  
是ヲ受ク既ニシテ勝利隆公ノ御前近摺寄テ某此度衆人ト  
共ニ来陣スル事本意ヲ失フニ似タリトイエトモ全ク私ノ

宿意ニ非ス只君命ト衆人ノ誘ヒ逃レ難キ行懸リナリ貴邊  
ニ對シテ努聊疎意ヲ存セス今某貴君ノ御了簡ヲ察スルニ  
定テ身ヲ鋒刃ニ碎キ恨ヲ泉下ニ報セントコソ御覚悟アラ

ン然ル時ハ御一族此場ニ於テ亡ビ玉ハン事何等ヲ力歎カ  
ハシキ次第ニ候某カ愚存ニハ願クハ討死ノ思召ヲ改メラ  
レ身ヲ全フシテ一先城ヲ開キ世間ノサマヲ御覽セラレ候

カシ貴邊ノ領地ヲ衆中配分ノ期至ル誰シモ貧欲ノ輩ナレ  
ハ多少ノ諍ヒヨリ忽チ鋒楯ニ及ハン事必定ナリ貴邊其幣  
ヘニ乘シ兵ヲ起サハ當城ヲ取返シ本懐ヲ違セラレン事何

ノ疑ヒカアラント申サレケレバ家老小河筑後以下此儀然  
ルベシト同意ノ輩モ多カリシカ共隆信公是ヲ聞入玉ハス  
勝利又曰斯申某野心ヲ挟ミ足下ヲタバカリ御下城ヲ勸ル

扱トノ御疑有テ御兼引ナキニ於テハ某只今御味方ト成當  
城ノ一方ヲモ固メ申サン其下心ニテ逞兵五百餘リヲ引具

シタリ御下知ニ順フベシト云々隆公仰ラル、ニ御志ハ辱シ去ナカラ必死ノ覚悟ヲ究メシ上ハ何ソ他人ノ力ヲ假ラシヤト苦々シキ御返答ニ勝利ハ言句モナクシテ引返サル(直茂公具事ヲ御存成サレ御在世ノ内毎々御物語有シトナリ)

扱隆信公ハ鍋嶋清房并小河成富以下老臣等ヲ召シテ仰ケルハ今國中大半敵ト成テ其勢幾千万ト云ヲ知ラス然ルニ我纔五百ノ微勢ヲ以テ是ヲ防シ事叶フベカラス殊一族親類ノ中サヘ日々ニ離レテ敵ト成レハ當家ノ滅亡眼前ナリ我オオメト日ヲ送ルベキニ非ス所詮妻子ヲ刺殺シ潔ク自害スベシ何レモ其覚悟有テ然ルベシトソ仰ラル

家系事績 土橋加賀守和貞水江ノ鑑兼ニ内略スル日アリトイヘトモ時至ラサルカ故ニ未事ヲ発セス此度陶晴賢義隆ヲ討テ大友勃興スルニ依テ土橋此時ヲ幸トシテ十九人ノ城主(十九人或云十七人衆又云十三家衆)ヲ語ラヒ小貳冬尚ヲ大将トシテ兵ヲ發ス且大友屋形義鎮ニ訴ヘテ云自立ノ隆信ヲ討テ其采地ヲ分領セン大友是ヲ許ス爰ニ於テ十九人ト隆信相絶ス時ニ隆信村中ノ城ニ在リ射程長信(此時兵庫頭家信ト云後和泉守長信ト改ム)水江西

分ヲ領シテ水江西ノ館ニ在リ隆信ト一味ナリ竜造寺鑑兼東分河副ヲ領シテ水江東ノ館ニ在リ土橋ト一味ナリ鑑兼ハ長信ヲ退ケテ東西ノ地ヲ領セント思ヒ俄ニ長信ノ館ニ押寄ル

鎮西志 鑑兼郡士十九人ヲ驅催シ隆信長信ヲ併セ伐ント皆是土橋及西村伊豫守等カ所為ナリ小貳冬尚神崎ニ起リ有馬時統高木ニ起リ千葉頼胤小城ニ起リ神代勝利両高木胤秀鑑房八戸宗輝等北ニ起リ馬場筑紫宗横岳上犬塚本告姉川小田政光東ニ起リ竜造寺ニハ一族十三人日向守右衛門太夫伊豆守等親子與ミス

爰ニ深町理忠ト云者小田政光カ老臣ニシテ蓮池ノ歴々ナリ主人政光ニ申ス様某隆信ノ氣質ヲ察スルニ今度ノ義定テ死ヲ一戦ニ決スルノ覚悟ナラン然レハ譜代ノ忠臣勇士凡千余人モアラン歟其輩必死ト成テ防キナバ味方ノ一萬過半ハ損スベシ抑合戦ハ城ヲ責メ多ク兵ヲ減スノミヨ善トセス勝ヲ戦ノ善ナルモノコトソ申候ヘ此故ニ某存スルニハ君ト隆信トハ兼日ノ旧識ナリ某カ申條ヨモ疑モ候フ

マジ隆信ヲ有メテ下城セシメシコト某カ方寸ニアリト申セシカバ政光尤ナリ汝ヨキニ計ラヘト有シカバ理忠ハ直ニ諸將ノ陣ヲ馳巡テシカシカノ由ヲ告ク諸將皆御邊ノ計ラヒニ任スベシトノ義ナリシカバ理忠ハ水江ノ館門ニ來リ深町理忠所用有テ來レリ小河納富ニ面談シタリシト申入ル兩人出逢テ所用トハ何事成ゾ御入り有テ申サルベシト理忠館ニ入り兩人ニ向テ云某恐レナカラ推察仕ルハ今度隆信公ニハ定テ必死ノ御合戦ヲ遂玉ハントノ御覚悟ニテコソ候ハシ然ル時ハ哀ムラクハ數十代御相傳ノ御家此時ニ絶ヘ御邊等ヲ始メ諸將ノ家モ又残り少ナニ亡ン事歎カハ敷次第ナラスヤ爰ヲ以テ自他安全ノ和平ヲ取扱ント存シ諸將及主人政光ニモ相談ノ上参リタリ何角扱置隆信公御兄弟御一族御身ヲ全フシテ一先當城ヲ御啓キアル様御邊等トシテヨキニ計ヒ玉ヘカシ此事御兼引有ニ於テハ

某爰に留リ人質トナラント餘義ナク申入シカバ兩人逐一ニ公及清房ニ申セシカ共公一團聞入玉ハス爰ニ於テ清房小河納富福地(隆公ノ家長一石井村山鷲崎西岡(長信ノ家長)等ト謀リ頻ニ隆信公ヲ勸メ奉リシカバ公モ今ハ其義ニ隨ヒ金公ノ先蹤ニ任セ城ヲ去リ筑後ニコソハ赴キ玉フ母堂慶闍孺人宗蘭息女静室(七才)御舎弟長信公鍋嶋清房福地主殿允納富左馬助石井藤兵衛尉村山内蔵助鷲崎主殿助西岡丹後守其外御両家ノ家臣從フ者百餘人ナリ小河筑後守ハ子細有テ謫所ニ從ハス與賀ノ宮ノ邊ニ忍ヒ居タリト云々御兄弟河副ノ堤津ニ到リシニ柳川ノ城主蒲地武藏守鑑盛使船ヲ遣シテ是ヲ迎フ隆公御一族ト共ニ河ヲ渡リテ鑑盛ノ領地一ツ木村ニ入ラル(二木或ハ廣次トモ)祖父御齧

居ノ所ナリ領主鑑盛從者ノ賄料トシテ三百石ノ地面ヲ贈ル隆信公原十郎家俊家ニ客タリサレバ佐嘉ニハ龍造寺鑑兼村中水江ノ両家ヲ合セ土橋加賀守万事ヲ執行フ龍造寺村中ノ一族高木鑑房八戸宗暲小田政光神代勝利以下ノ頭分十三家御兄弟ノ御領地ヲ分テ是ヲ押領ス是ハ大内義隆ノ老臣陶尾張守晴賢カ取成ニヨル所ナリトソ(或云國中ノ衆十九人同ク大夫ニ屬スト然共義隆ニ屬シテ隆信ヲ護セシ證據ヲシカナリトソ)

或説ニ云清久入道道濟病ニ卧シテ起事能ハス子供等ニ

### ◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- 会員の種類
 

個人賛助会員	年会費	一口	3,000円
法人賛助会員	年会費	一口	10,000円
- 入会申込み・お問い合わせ
 

〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原庫舎内  
 公益財団法人 孔子の里 事務局  
 電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320  
 E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
 詳細は当財団ホームページ  
 をご覧下さい。



### 公益財団法人 孔子の里 販売物 (税込)



- ◇ 論語 日めくりこよみ 700円
- ◇ 百人一首式 論語カルタ 2,500円

問い合わせ先 公益財団法人 孔子の里 電話 0952-75-5112

当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。



告テ曰大器ナル哉隆信肥筑ヲ吞テ足レリトセス九州ノ元帥タランカ城ヲ避テ顧ミス後勝近キニ有ン汝等努力シテ其期ヲ愆ル事ナカレ清房父子ハ筑後ニ從ヒ清正父子密々ニ當國ヲ調ヘヨ翌年三月八日清久入道道濟卒ス利叟ト号ス年七十五



肥前国多久邑八景詩紹介（其の四）

城川奔流

城川洶湧自渾々

萬頃晴波日夜奔

逝者如斯流不盡

聖門有術問真源

城川洶湧シテ自カラ渾々

万頃ノ晴波日夜奔ル

逝ク者ハ斯ク如ク流レテ尽キズ

聖門術有リテ真源ヲ問フ

諸官快堂 林信允士僱甫

城川奔流

長川流不盡

高閣迥生愁

此地莫辞醉

坐教白髮垂

長川流レ尽キズ

高閣迥カニ愁ヲ生ズ

此ノ地酔ヲ辞スル莫レ

坐ニ白髮ヲシテ垂レシム

経筵講官 林信智艸



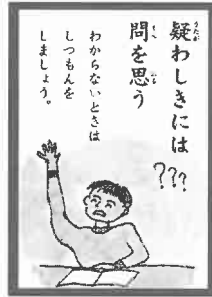
私の好きな論語



「過ちては則ち改むるに 憚ることなかれ」

ぼくは、ウソをつくから、今度からウソをつかないで、正直にあやまろうと思いましたが。大人になって、ウソについてはずかしい思いをしないうためにこの論語をえらびました。

（小学校3年生 Iさん）



「疑わしきには問を思う」

私は、勉強がにがてでこの意味のよいうに分らない時は先生や友達に質問して、少しずつ分らないところをなくしたいからです。私は将来の夢は変わると思うけど（今は保育士です。）子どもたちに分かるように教えてあげたいです。

（小学校6年生 Hさん）

NHK アサタビ再放送決定

『輝く！孔子の里の子どもたち  
～佐賀県多久市』

昨年6月放送されたNHKアサタビが、  
10月14日（日曜日）朝6時～  
NHKBSプレミアムで全国放送 決定

放送大学 佐賀学習センター  
出前公開講座のご案内

演 題

佐賀藩弘道館の教育方針をめぐる  
一草場佩川と若者たち

講 師

佐賀大学地域学歴史文化研究センター  
講師 三ツ松 誠 氏

日 時

平成30年12月15日（土）14:00～

場 所

東原庁舎 講堂

参加費

無料

# 《儒林》

多久では先覚者・先賢を儒林と呼んでいる

## 深江順房 (一七七二〜一八四八年)

明和八年(一七七二)七月十日、深江順清の長男として多久御構内に生まれる。字伯良、諱は順武・順房、通称三太夫、簡齋と號する。

幼くして邑校東原庵舎に学び、寛政三年(一七九二)邑校の句読師、同七年(一七九五)藩校弘道館に遊学。寛政十三年(一八〇二)多久へ戻り、邑校の教官、享和三年(一八〇三)教授となる。文化二年(一八〇五)大監察に就任し、邑校の教授を兼ねる。同年、父順清が退老し家督を嗣ぐ。弘化四年(一八四七)退老。嘉永元年(一八四八)正月十日没す。享年七十八歳。南多久町長尾の黄檗宗福聚寺に葬られる。

水江龍造寺の血筋を持ち、水江龍造寺五世(後多久家初代)多久安順から数えて七代目にあたる。深江に名を改姓したのは順房の祖父順孝の時である。順孝の父多久安成(顔楽齋)は多久初代領主安順の曾孫にあたる。安順の正室徳寿院は佐嘉藩の藩祖鍋島直茂の娘、佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の姉である。しかし正室徳寿院には子供が生まれなかったため、本来ならば側室の長庶子の茂順が多久家の二代目を嗣ぐところであるが、本藩の鍋島家と正室の徳寿院に遠慮をしたのか、武雄後藤家(後藤家均)へ嫁いだ安順の妹(心光院)の嫡子茂富を養嫡子とした。ところが後に茂富は安順の怒りをもって家を嗣げず、茂富の嫡子茂辰が多久家の二代目領主を嗣いだ。

領主となった茂辰は自分の妹を茂順の嫡子茂旨に嫁がせて、茂旨(多久奎佑)を多久家の家老に取り立てている。茂旨の嫡子安成(顔楽齋)は儒学をもって四代領主茂文の信任を得て多久聖廟(恭安殿)の創建の責任者として活躍する。安成の次男が順孝(順時・順正)である。領主茂文は安成の功績を賞して、嫡男ではない順孝に八十石の禄を与えて、京都遊学をさせ、邑校東原庵舎の講官としている。順孝は別家を興すに当たり、母方の深江姓を用いている。この順孝の孫が順房である。

順房は、多久の近世史を研究するための土台となる歴史書を数多く編纂している。

その代表的なものとして、『丹邱邑誌』全五巻。巻之一では沿革、地理、鄉村宿駅、戸口・牛馬・田畑・宅地・諸課税、特産物、聖廟、学校等。巻之二では祠廟(百五社)。巻之三に仏寺(四十六寺)。巻之四には堂、庵、破壊寺庵坊、古墳、古城蹟。巻之五には雑識、その他。

多久家家臣団百五十氏、二百五十三家を網羅した『多久家諸家系図』全七巻。

第十代領主茂澄と共に江戸へ向かった時の『御出府控』。

水江龍造寺氏の事績を記録した『水江事略』全十九巻の内、巻十四「蘭山府君御年譜」。

『多久私領神社仏閣小祠石仏調子書』などがある。(服部)

【参考文献】『佐賀先哲叢話』中島吉郎著(木下泰山堂、一九〇二年)

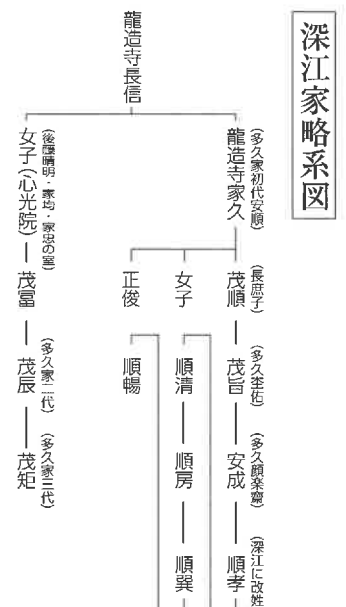
『舊多久邑人物小誌』(舊多久邑史談會、一九三二年)

『丹邱邑誌』(深江順房撰、多久古文書の村校訂、文献出版、一九九三年)

『多久市史・人物編』(多久市、二〇〇八年)



▲深江家の墓地(南多久長尾の福聚寺) 前列右から、順孝、順清、順房、順翼、順暢



## 来訪・来信・雑識

- 4月3日 平成三十年度多久聖廟春季積業委員会
- 4月5日 聖廟の森に楷樹苗五本を植栽
- 4月6日 鹿島防災具店代表取締役大石安兼氏寄付金の贈呈
- 4月18日 平成三十年度多久聖廟春季積業多久古文書の村。東原座舎にて二十九年度大寄合
- 6月2日 中国古典の扉①  
(公益財団法人 孔子の里理事 武田耕一)
- 6月5日 はじめて学ぶ古文書①  
(多久古文書の村 村民 片倉日龍雄)
- 6月7日 同朋保育園一行、多久聖廟にて論語の素読
- 6月16日 「鶴山塾」米倉権兵衛清英と大隈重信
- (多久古文書の村 村民 多久島澄子)
- 7月1日 三養基郡みやき町、「楷仁会」一行多久聖廟に来廟
- 7月4日 多久・曲阜友好都市締結二十五周年記念  
(市民の翼として訪中(曲阜・泰山・北京))
- 7月7日 中国古典の扉②
- 7月12日 拓本に親しむ①
- 7月28日 「水江事略を読む」①
- 8月2日 拓本に親しむ②
- 8月4日 中国古典の扉③
- 8月7日 はじめて学ぶ古文書②
- 8月23日 「安岡定子と行く長崎佐賀の旅」一行、多久聖廟を訪れる。
- 9月4日 はじめて学ぶ古文書③
- 9月6日 拓本に親しむ③
- 9月8日 中国古典の扉④
- 9月29日 「水江事略を読む」②

### 楽しいひと時のお礼

先日、八月二十三日には、こちらで多久聖廟などを見学させていただきました。その折、ジュニアボランティアの小学生の皆さんが高らかに論語の核心を語り、私たちを導いてくれました。

緑の山々の中でゆつくりと穏やかなひと時を過ごしました。大学で中国の歴史を学び、東京の中学校で教員生活を送って来ましたが、小学生の伸び行く姿に接することができたのは、何よりの喜びでした。

(神奈川県川崎市、近藤 順一)

### 多久聖廟を訪ねて

全国で「安岡定子論語塾」を主宰する安岡定子先生にお願いして銀座と湯島聖堂での受講生有志十一名で念願の「多久聖廟」を訪問させていただきました。

暑いくらの日差しの中、夏休み中にもかかわらず可愛い「ジュニア・ボランティアガイド」の皆さんが待ち受けてくれていました。

学問所跡と多久茂文公の説明から始まり、孔子廟の歴史まで分かりやすく、誇りを持って語る姿に先ず、新鮮な感銘を受けました。このようなジュニアガイドは私にとって初めての経験だったと思います。

## 訃報



ももさき もとひろ 氏  
**百崎 素弘**  
佐賀市神園

1926年10月15日～2018年8月18日(91歳)  
財団法人孔子の里初代理事長。  
平成2年2月～平成9年9月迄、理事長を歴任。  
丹邱の里整備事業を推進。  
平成3年10月東原座舎の建設。  
平成5年、中国山東省曲阜市と友好都市を締結された。



いわなが ともきち 氏  
**岩永 友吉**  
多久町東の原

1939年5月27日～2018年5月14日(78歳)  
永年に亘り、多久聖廟積業の門扉開閉業務に携わる。  
晩年は聖廟周辺環境整備に尽力された。

## 寄贈図書

■安岡定子先生 寄贈図書



①実践・論語塾



②ドラえもん はじめての論語



③アスリート 論語塾

多久聖廟を訪ねて

前回、多久聖廟を訪れたのは、昨年の十月でした。秋の気配が感じられ、凜とした静かな佇まいがいつまでも心に残りました。『論語』を学ぶ者として、心引きしまる思いと同時に聖廟一帯に人を包み込むような穏やかさも感じられました。

今年、再び訪れる機会に恵まれました。今回は、東京の論語講座受講生の皆さんと一緒に。昨秋の多久聖廟での感激を、今度は是非皆さんと分かち合いたいと思ひ、実現した旅でした。



論語講師・安岡定子先生一行が来廟!!

全国各地で数多くの論語塾を開催されている安岡定子先生が「銀座・おとなの論語塾」の皆様と一緒に多久聖廟にお見えになり、ジュニアガイドの5名が案内をしました。当日は、天山酒造の七田利秀会長、天山本舗の七田義孝社長もお見えになり、旧交を温めておられました。利秀会長のご尊父様の天山酒造三代目七田秀一氏は、戦後の食糧不足を解決する為に私財を投じて農業指導者の養成教育学校『天山高農塾』を開設され、その講師として、安岡定子先生のご祖父・安岡正篤氏(陽明学者)が度々訪れられ投宿されていました。また、義孝社長のご尊父・秀孝氏は佐賀市龍泰寺で行われていた関西師友会(安岡正篤氏の勉強会)の中心メンバーとして活動されていたご縁。

変わることはない静寂と、木立に抱かれるように長い年月を刻んでいる聖廟。もうそれだけで心を満たしてくれそうです。この佇まいを愛し、守り、継承している方々のご尽力の賜以外のなにもありません。二度目の訪問だからこそ気づくこと、考えることがたくさんありました。さて私たち一行が最も楽しく心弾んだのは、ジュニアガイドの皆さんの登場でした。孔子像や茂文公の思ひ、『論語』の章句。それぞれの解説は、はつきりとした大きな声で、しかも美しくハモってさえいました。その内容も素晴らしかったですが、五人のお嬢様方の姿が、そのものに、一同の目が釘づけになりました。日頃から、さぞ練習していることでしょう。夏休みにも関わらず、私たちのために集まって下さったことがとても嬉しかったです。

若い世代に繋いでいくことは、どの分野でもどの地域でも難しく、苦心されるどころですが、ジュニアガイドの育成は、必ず将来、花が咲いていくことと実感しました。論語かるた大会の実施と充実、ジュニアガイドの育成。これらは子どもたちを見守り、導く大人が存在がなくては成り立ちません。理解し協力していらっしゃる親御さんも素晴らしいと思います。たった半日の滞在でも、深く心に響くものがあり、心地よいのは、濁りのない心で守られた空間だからでしょう。いつかまた訪れた時には、もっと深く理解し、感じられる自分でありたいです。

がつている感じがして嬉しくなります。出会えた皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。  
安岡定子(論語塾講師)

● 聖廟の森に棲む動物たち ●

ヤマセミ

カワセミの仲間が一番大きいのがヤマセミである。白と黒のかわいらしい模様が特徴で、出会えばすぐわかる。山間部の水辺に住まいで、溜池にもやってくる。西溪公園の奥にある小さな溜池でも撮影したことがあるから、多久では珍しい鳥には入らなかった。ところが二〇〇〇年を過ぎたころから姿が見えなくなった。行けば必ず観察していた岸川地区でもだめになった。多久川でも見ないし、厳木ダムでや七山の玉島川上流でも苦勞するようになった。

ヤマセミが多久を捨てたの無ければいいのだが…。  
(日本野鳥の会 福田 司)



▲ヤマセミ

編集後記

曲阜市との友好都市締結二十五周年の記念事業で、曲阜・泰山・北京を訪れた。孔子様の墓園孔林では、二千五百年前に孔子様が亡くなりになった時に弟子の子貢が手植したと伝えられる「楷樹」の根っ子を見てきた。帰多久したら、多久聖廟の楷樹が北側に倒れかかっていた。七月三日夕方に台風七号が対馬海峡沖を通過した際の南風の影響と思われる。この樹木は、大正四年、当時の農商務省林業試験場の初代場長の白澤保美博士が孔子様墓上で種子を採取して東京目黒の林業試験場で播種、育苗され、国内各地の学問の地に植樹された。九州では大正十三年に鹿児島第七高等学校へ二本贈られている。大正十三年秋の秋葉に訪れた七高教授の山田準先生(山田方谷の孫娘の婿)より話を伺った多久の漢学者大塚山翁は七高学長の渡部董之介先生に懇願して一本の楷樹が鹿児島第七高等学校より贈られ、大正十四年三月九日に多久聖廟境内に植えられた。林業試験場で発芽して百三年、多久の地に植えられて九十年目となる。聖廟創建三百年、護り継いでこられた先賢の熱い想いを引き継いでいきたいものです。(服)